

令和2年12月16日

国土交通省 中国地方整備局長

小平 卓 殿

中国地方ダム等管理フォローアップ委員会

委員長

関根 雅彦

尾原ダム定期報告書の総括について

中国地方ダム等管理フォローアップ委員会は令和2年12月16日に尾原ダムに関する定期報告の審議を行い、下記10名の意見により本フォローアップ委員会としての総括をとりまとめたので提出する。

記

氏 名	役 職	専門分野等
うちだ たつひこ 内田 龍彦	広島大学大学院 先進理工系科学研究科 准教授	河川工学
うみの てつや 海野 徹也	広島大学大学院 統合生命科学研究科 教授	魚 類
せいけ やすし 清家 泰	島根大学 研究・学術情報機構 エスチュアリー研究センター 特任教授	水 質
せきね まさひこ 関根 雅彦◎	山口大学大学院 創成科学研究科 教授	水 質
つるさき のぶお 鶴崎 展巨	鳥取大学 農学部 生命環境農学科 教授	動 物
なかごし のぶかず 中越 信和	福山大学 グリーンサイエンス研究センター 客員教授	植 物
ふくもと ゆきお 福本 幸夫	広島市安佐動物公園 元園長 広島大学 生物生産学部 客員教授 帝京科学大学 生命環境学部 元教授	鳥 類
み わ ひろし 三輪 浩	鳥取大学 工学部 教授	河川工学
やまだ ともこ 山田 知子	比治山大学 現代文化学部 教授	社会環境
よしだ けいすけ 吉田 圭介	岡山大学大学院 環境生命科学研究科 准教授	河川工学

◎は委員長

第 30 回中国地方ダム等管理フォローアップ委員会

尾原ダム定期報告書の総括

○「第 30 回中国地方ダム等管理フォローアップ委員会」において、「尾原ダム定期報告書」の審議を行った。

○審議は、「防災操作、利水補給、堆砂、水質、生物、水源地域動態」の 6 項目について、平成 28 年度から令和元年度までの期間を主な対象として行った。
各項目に関する審議結果は以下の通りである。

1. 「防災操作」

評価期間である平成 28 年度～令和元年度の間に、計 4 回の洪水が発生し、必要な操作を行い、所期の機能を発揮している。今後も気候変動の影響によって、豪雨の頻発・激甚化が懸念されており、ダムの効果を最大限発揮できるよう、引き続き事前放流や特別防災操作などを含む防災操作を行われたい。

2. 「利水補給」

所期の機能を発揮し、受益地に貢献しているが、評価期間である平成 28 年度～令和元年度の間に渇水調整が 6 回発生している。今後は、ダムを適切に管理・運用し、ダム下流域への利水補給を行うと共に、渇水調整の手法について検討されたい。

3. 「堆砂」

管理上の問題は生じていない。今後も適切な方法により測量等を継続して実施し、堆砂状況を把握されたい。

4. 「水質」

利水上の影響は生じていないが藍藻類の異常繁殖（アオコ）が発生しており、今後悪化することもあると考えられる。また、底層の貧酸素化に伴うマンガン等の溶出が進行することもあると考えられる。このため、ダムの管理・運用に必要な水質や底質の調査を継続するとともに、巡視などの日常管理を通じてアオコの発生など水質状況の把握に継続的に取り組まれたい。
また、アオコ発生メカニズムについて、より具体的な把握を行うため、必要な調査について実施し資料を蓄積されたい。加えて、現状で対応可能な水質維持に関する方策を予め検討し、必要に応じて適宜実施されたい。

5. 「生物」

生物の生息・生育環境に大きな変化は見られていないが、今後も調査を継続し生物の生息・生育状況の把握に努められたい。
また、保全対策については、今後も効果把握のため適宜必要な調査を定期的を実施することと日常的な維持管理を通じて効果の継続的な発現に取り組まれたい。
加えて、土砂還元については目的を明確に設定するために必要な調査を実施し、より効果を発揮出来るように取り組まれたい。

6. 「水源地域動態」

尾原ダムが果たす治水や利水の役割について、ダム下流域への貢献状況を地域に理解されるような「ダム管理の見える化」を促進されたい。
ダムを活用した水源地域活性化の取り組みは地域や各種団体とダムとが協力し、地域活性化に貢献しているが、担い手確保等の課題があると考えられる。このため既存制度の活用により、新たな地域活性化活動の展開や具体化、持続性の確保について検討されたい。

以上